

## 第9章

### なぜ「彼ら」はそんなにも語ってくれたのか

大阪市立大学大学院創造都市研究科  
都市共生社会研究分野  
菅原 智恵美

今回の調査は、前半（6～7月）に深夜営業のネットカフェ・漫画喫茶（24時間営業のファーストフードを含む）を利用している人たちを中心に、後半（10～12月）は自立支援センター利用者を中心に聞き取り調査を行った。これら前半・後半の調査を通じて私が感じたことや私なりに見えてきたことを、まだ未整理のままだが、覚書として記しておきたい。

#### 9.1 前半（ネットカフェ等利用者へ）の聞き取り調査を通じて感じたこと

##### 9.1.1 調査のようす

私自身、ネットカフェの利用は一度しかなく、また漫画喫茶については一度も利用したことがないので、そこがどういう場所で、どういうシステムなのか、どのような人々が利用しているのか、こうしたことについては全く知らなかった。今回の調査で店舗前に立ち、意外に思ったことは幅広い層の人が利用しているということだ。若者も多いが中高年層の人たちや高齢者の人たちなども多く利用していた。また旅行で利用している人もいれば、会社へ行く前に、あるいは会社帰りに利用しているなど様々であった。会社帰りの利用者の中には自宅が遠く、仕事の終わる時間が遅くて、帰宅するための交通手段がなく、仕方なくそこに泊まっているサラリーマンの人もいた。想像していたよりも利用者層の幅の広さに驚いた。

前半のネットカフェ深夜営業利用者への聞き取り調査は、大阪府下にあるネットカフェ店舗の出入り口や店舗に通じるエレベーター前に極力店舗営業の妨げにならないように立ち、利用者への調査依頼を行った。対象者となる人は見た目では判断できないので、旅行者等、対象者として明らかに該当しない人以外に調査依頼の声をかけていった。私の場合、闇雲に声をかけたため、こともあろうにマンガ喫茶の店長に声をかけてしまい、その後その店舗の前では調査協力依頼がしばらくできなくなってしまった。

調査の時間帯は夜間と早朝だった。夜間はナイトバック（夜間の決まった時間に受付が開始され、朝までの利用料金が割安になるサービス）開始時間の午後10時か11時ごろに駆け込む人たちや店舗前の料金表を確認している人を中心に調査依頼の声かけを行った。早朝の場合も夜間同様、店舗前に立ち出てくる人に声をかけた。時間帯はナイトバックを利用し延長しなかった場合の時間帯である午前6時ごろから行った。朝の調査の場合は、これから仕事に行く人、派遣会社に仕事を探しに行く人も多く、その人たちは足早に私たちの目の前を通り過ぎてしまい、調査への協力を依頼しても断られることが多かった。また

「後日ならいいよ」と調査依頼のチラシを受け取り、後日の協力を約束してくれた人もいたが、しかし実際に後日聞き取りを行えたことはほとんどなかった。早朝・夜間の時間帯に限らず、調査依頼に対しては「うるさい」「面倒くさい」「ちがう」という返事や、無視したり怒鳴ったりなどし、協力依頼を断る人も多く、聞き取りがまったくできない日もあった。見ず知らずの人にいきなり声をかけられた時のそういう対応はごくごく当たり前の反応だろう、とも私は思った。

### 9.1.2 調査協力者の「無防備さ」

しかし一方では、調査に協力をしてくれた人たちがいた。私が今回の調査に従事して強く感じたことのひとつ、それは調査に協力してくれた人たちの「人の良さ」というか、ある種の「無防備さ」である。調査協力の理由に関しては、抱える課題が困難で「相談する人がほしかった」という人もいたので簡単に「人の良さ」「無防備さ」とひとくくりにはできないのかもしれないが。

調査員は調査を依頼する際、自らの所属や調査の趣旨などを説明する。しかし、声をかけられた側にしてみればいきなり見ず知らずの人に、それも紙袋や調査票を片手に持った人たちに「ちょっとそこでお話を聞かせてください」と言われる。そして近くのファーストフード店などに連れて行かれて、自分の生い立ちやこれまでの仕事、家族関係など、私的な事柄について質問をされる。「普通感覚」からすれば、警戒してそんなものは相手にしない、そのようなシチュエーションである。

しかし実際には、調査に応じてくれた人たちが少なからずいたのである。もちろん、調査員による事前の説明を聞いて一定の「安心感」はあったのかもしれないが、それにしても、近くのファーストフード店まで足を運び、自らの生い立ちやこれまでの経緯、現在の心境や当時の心境、困っていること等についてかなり詳細に話してくる人がいるということ、このことは私にとっては驚きだった。私は「なぜここまで丁寧にそれも詳しく話をしてくれるのだろうか」、調査依頼をしておきながら勝手なことを思ってしまうが、このことが不思議でならなかった。ある人は自分の家族関係について、また酒気帯び運転でつかまり裁判所にも出向いたことなどを話してくれたり、住民票や手帳の中身や携帯電話の使用料金明細の控えなども調査員に見せてくれたりした。また、家族との不仲や借金、病気、さまざまに抱えている「私的な」問題などについても話してくれた人もいた。なぜそこまで、しかも街中で初めてあった人に、「無防備に」接することができるのかが不思議でならなかった。

人と人との関係が薄れている今の社会のなかで、人間関係や生活のしんどさ、身内のもめごとや借金など、「私的なことがら」については他人には話さず、隠しておきたいというのが「普通」なのではないかと、私などは思ってしまう。それをなぜそこまで無防備なまでに話ができるのか。見ず知らずの私たちになぜ語ってくれるのか、それとも見ず知らずの人たち、その場限りの関係だからこそ話すことができることなのだろうか、不思議でならなかった。

この「人の良さ」というか、「無防備さ」は彼らにとってプラスにもマイナスにもはたらいているのではないだろうか。実際にこの「人の良さ」や「無防備さ」が関係しているかはわからないが、調査協力者の人たちの中には借金や騙されてお金を取られたという人も多い。逆に、「偶然飲食店で隣に座った人に仕事を紹介してもらって助かった」、「飛び込みでお願いしたコンビニで雇ってもらえた」などプラスにはたらいているのではないかと思うようなこともある。

## 9.2 後半（自立支援センター利用者へ）の聞き取り調査を通じて感じたこと

ネットカフェ前での調査後、自立支援センターに入所している人たちへの聞き取り調査を行った。この後半の調査も前半同様、調査協力者の人たちは自らのことを丁寧にそれも詳しく語ってくれた。

そしてかなり強く印象に残ったことは、現在の派遣の渦に巻き込まれているためか全国各地、様々な地域で様々な仕事をしている人が多いということだ。派遣会社の面接後、＜岡山―岐阜―名古屋―静岡―滋賀＞に移り渡り、産業も自動車工場から製紙工場、製菓工場等様々な分野の仕事に就いている人もいる。契約期間が満期になれば次に移る、また雇用条件がはじめに聞いていたものと違ったり、人間関係のこじれから途中で逃げ出したりし、次の仕事を探すという人も多かった。また、もう一つ印象に残っているのが出身地と従事してきた職業についてだ。私が聞き取り調査のメモを担当した人の出身地も様々だったが印象に残っているのは地方出身者が多かったということ、また仕事でいえば自衛隊や住み込みで働けるパチンコ店、新聞配達所で働いている人が多かったように思う。北海道出身で父親は炭鉱の労働者、そして酒乱。酒乱の父親が嫌で中学を卒業後、家を出て働きはじめた人。また、親が昆布漁の漁師であり中学を卒業してからは漁の季節以外は父親と出稼ぎで働いていたという人もいた。生活の困窮のため母親と一緒に生活することができず施設で幼い頃を過ごしたという人など様々な背景を抱えている人たちにであった。生活史のメモを取りながら、個人の意志で選り出したものではなく社会が必然的に生み出したしんどさを抱えた人たちが多いのではと感じた。また、今の社会はこの人たちの層を組みこむことで成り立っている。しかし、その社会は彼らを守ることもせず、関係性が絶たれている——そう感じた。

彼らの生活はとても過酷だ。多く的人是は住み込みで働ける派遣の仕事に従事していた。何とかそこでがんばって働いたとしても、住み込みであれば寮費・食費等・ふとん代等さまざまな名目で給与から天引きされ、手元に残るのはわずかなお金であったり、マイナスになったりするときもある。また契約が切れたり逃げ出したりした後、次の仕事に就くまでのあいだは住む場所がなく野宿する。そして食べるものがなくしんどくなれば、フリーペーパーに載っている派遣会社に電話し、迎えに来てもらう。その生活の繰り返しである。社会の制度やシステムそして家族や友人等、誰にも守られず、逆に制度や人に傷つけられ様々な機会も奪われている。傷つけられちからを削ぎとられている人があまりにも多いのではないか。

## 9.3 共通して感じたこと

### 9.3.1 人とのつながりのうすさ

前半、後半ともに共通して感じたことは、人とのつながりが希薄な人が多いのではないかとことだ。家族、友人、知人、社会とのつながりが絶たれている。ネットカフェで寝泊りをしている人は、同じ空間で寝泊りをしている人たちに対して関心や関わりを持たないようにしながら生活をしているように感じた。仕事をみても週単位、月単位というような継続的なものもあるが短期や日雇いでその日、その場限りの仕事や人間関係というものが多い。1日の生活を聞いてみても他者とつながる、関わる機会が少ない。あるネットカフェ利用者からは、「人との関係の煩わしさから今の派遣の仕事が楽でいい」「家族がいないときに自宅に戻り着替える」「ネットカフェ内では話をしたり、仲良くなったりということもない」といった声もあった。また借金のために居場所がばれないよう住居を持たず、世間から少し身をひいたところで生きていかざるを得なくなっている人もいる。また、ある住み込みで派遣の仕事に就いていた人からは、各部屋に鍵もない3LDKの寮に3人で生活をさせられたという話も聞いた。そこでは盗難やケンカなど

もあって、「人とつながる」どころか日々の生活で隣人や他人を疑いながら、そしていがみあいながら生活を送らなければならない。そのような生活の中で、誰かと気楽に話す機会があったのだろうか、ましてや自分がしんどいと感じることを話せるような人間関係をもつことなど可能だったのだろうか。聞き取りを通じて垣間見た「彼らの」生活からは、そのような「人間的な」関係性をうかがうことはほとんどできなかった。それどころか、これまでの生活で感じたしんどさ、辛さ、また現在の人間関係や社会に対する諦めなどを抱えたままで生きている。自分の置かれている現状のもたらすしんどさをすべて自らの「個人の問題」として抱えこんでしまっている。私は生い立ちやこれまでの経緯を語る人たちの話を聴いてそう感じた。

また、前半の調査で「必要な支援は？」という質問に「声をかけてほしかった」という回答があった。「困ったことを相談できる人は？」との質問には「いない」「家族は頼れない」「相談できる人はいない」という声も多かった。「住民票がない、住居がない、仕事がない、何を優先すれば安定した生活がおくれるのかわからない」という悩みを持った人もいた。ちょっとした悩みやしんどさを話せる友人や知人、家族とのつながりもない、そして生活や仕事で困難に陥ったとき相談する場も知らない人が多いということも強く印象に残った。翻って、それでは私自身の場合はどうだろう、と反省もさせられた。仕事を失い住居も失えば、田舎の親の元に戻るだろうか、誰かに相談したり助けを求めたりすることができるだろうか。もしかしたら親に相談するかもしれない、しかしその親もおらず一人であればどのようにすればいいのか、私もまたどこへ相談に行けばいいのか情報をもちあわせてはいない。また「本当に」困ったときに「相談」できる人など、私にあるのだろうか。

今回の調査ではNPO職員の方が、それぞれの医療相談、生活相談にもり社会資源へつないでいったケースもある。聞き取りをしていても、もっと早くにそういった機関に相談に行くことができればよかったのと感じることが多々あった。しかし、実際はそういう相談機関へたどりつくことも難しいということも、聞き取り調査を通じて知った。そしてもう一つ共通して感じたことは前述した調査協力者の「人の良さ」「無防備さ」ということだ。

### 9.3.2 聞き取りの場

もちろん今回の聞き取りは、以後の「持続的なかわり」を前提としたものではなく、1~3時間ぐらいの「つかの間」の、「その場限り」の「関係」のもとで成り立ったものだ。しかし、このはかない「関係」性の中で、彼らはたくさんのことを丁寧に語ってくれた。聞き取りをしながら、「彼ら」にあっては家庭、地域、さらには社会との関係が切れてしまい、これまでの生活はあまりにも孤独だったのかも知れないと感じた。これはもちろん私の勝手な想像でしかないけれども、その孤独な生活の中で、彼らには「人とつながりたい」という欲求がどこかにあったのではないだろうか。調査協力者と調査員の限られた時間、場の中での「関係性」ではあるが、その「場」の中に彼らは「人とつながる」ということを、その実感を、求めていたのではないか、とも私は感じた。そして私もまた、このつかの間の「関係」のなかで、彼らの「無防備さ」や「人の良さ」を感じたのかもしれない。

## 9.4 識字とつながる

私は聞き取りのメモをとりながら「ああ、識字と同じだ」と感じていた。私は、被差別部落から生まれた識字教室に参加している。そこでは様々な背景をもった人たちが集い学んでいる。識字では、参加者の

生い立ちを丁寧に聴き、そこからその人が受けた抑圧や差別を対象化していく。自分の中に押し込めてしまいたい、怒りや悲しみ、苦しみ、その人が抱えるしんどい部分に自身が、また周りの人がともに丁寧に向き合い、ちからに変えていく作業を行っている。識字は読み書きを学ぶだけでなく、自分を取り戻す場でもある。今回の聞き取りは「調査」であり、抱える問題に向き合い、自分を取り戻す識字のような場所でも機会でもない。しかし聞き取りの中で、自分のことを丁寧に語っている人たちの話を聴いていて、自分（彼ら）でも気づかないしんどさや、辛さ、親や幼少のころの生活に対する思いなど、その「しんどさ」を「対象化」して吐き出しているのではないか、と感じた。

ネットカフェ前で調査の依頼をし、聞き取りに協力してくれたある人は調査員の「なぜ近くにある実家で生活しないのか？」という質問に対して、少し考えてから、「今まで考えなかったし、気づかなかったけど、帰らないのは家にいづらいというものもあるかもしれない。正社員で働いているわけでもないし、両親は心配しているのでそのことで気詰まりがあるのかもしれない。こうやって話すまではそんな風に思わなかったけど、それが大きい原因だと思う」と。何気ない質問と何気ない答えかもしれない。しかし、その何気ないやり取りのこの過程は、これまで私が「識字」の現場で見てきた光景と重なるものだった。日常の生活についての語りの中から聴く側があることに焦点をあて、そして語る側は自分の気づかない内にあるものに向き合い、振り返る。これはこれまで識字で行われてきたことなのだ。そしてこの作業はひとりでは決してできない。人とつながることがなくては、そしてつながることを可能とする「場」がなくては、不可能なのだ。

## 9.5 自らを取り戻し、連帯していく場の必要性

私は調査に参加しながら「識字のような場」がもっとあればと思った。自分の内にあるしんどさを無防備に語るができる場、そしてそれを受け止め、つながっていくことが、そしてもっといえば「連帯」していくことができる場（人）が必要ではないかと。自分のことを語り、対象化することで自分の立っているところを確認できる、そしてその背景にある問題もみえてくる、その問題に対しては、一人で向き合い、闘っていくのではなく、話を聴き、その「しんどさ」を「共有」した人たちが連帯しともに闘っていく、そのような場が必要なのではないか。

調査協力者の中に、子どもの頃の施設で生活していたときの記憶と、今はもはや亡くなってしまった「自分を捨てた」母親への思いと、さらには「怒り」「うらみ」を抱え込んだまま、それらを背負ったまま生きてきている人がいた。このような彼だけではなく、聞き取りに協力してくれた多くの人が、多かれ少なかれ、人にはいえない「重荷」を一人で背負って生きています。このような「彼ら」にとってこそ「識字のような場」は必要なのではないか。これまで自らを語ること、振り返ること、他者と共有するということが、そのような機会と場を持つことがなく、抱えきれないほどのしんどさを「一人で」背負って生きていく人があまりにも多いからだ。

生活をしていくための仕事やそのための住居などはもちろん必要だ。しかし、それと同じように切れてしまった、削がれてしまった人間関係を紡ぎなおすことも必要ではないかと思う。聞き取りをしてきた人たちはこれまでさまざまな生き方をしてきている。家族、家族以外の多くの人たちとの、「あたたかな」とまではいなくとも、それなりの「人とのつながり」があるならばまだいい、そうではなく、一切の人とのかわりを絶たざるをえないようなところで生きることを強いられている人たちが大勢いる、このことを知らされた。

こんな感想では甘ったるいかもしれないが、傷ついた人とのつながりや心身に受けた傷や痛み、断たざ

るを得なかった人とのつながりの修復こそ必要なのではないかと思う。そういった場も、支援の中に必要なのではないだろうか。